90歳の少女と魔法使いの美青年

松本侑壬子・ジャーナリスト

2003年、米アカデミー賞長編アニメ部門賞を受賞した『千と千尋の神隠し』に続く宮崎駿監督の最新作。国内公開を前にこの作品も既に2004年のベネチア国際映画祭でオゼッラ賞（技術貢献賞）を受賞している。原作は英国女性作家の同名のファンタジー小説である。

動く城とは、何か？　画面に現れたものは、城というよりも、ガラクタを集め、重ね合わせ、継ぎ足し継ぎ足しして構築した巨大な陸上の軍艦という感じ。あるいは、フランス生まれのユニークな女性彫刻家/画家ニキ・ド・サンファルが1960年代初めに実演した「射撃絵画」の標的のコラージュにも似ている。壊れた人形から釘、ボタン、切符の切れ端、かみそりの刃、額縁、造花、ビーズ、小石、ジグソーパズル、刷毛、車輪などどこから集めてきたのかと思うほど雑多なガラクタを白い塗料で塗り固め，その中に絵の具を入れた小ビンを仕込んでおく。銃で画面を撃てば、ビンが割れて原色の絵の具がまるで血のように白い画面を流れ落ちて…。ガラクタを銃で撃つ行為には、スカッとする爽快感。それとともに何かしら怒りや憎しみを背負う攻撃的な暴力性が漂う。醜いものへの嫌悪感か、幼いころ愛情の名の下に実父から受けた性的虐待への怒りか。言うに言われぬ苛立ちをニキは前衛芸術の名の下に銃で打ち砕いたのだ。

いや、ニキの前衛芸術に劣らず、この宮崎アニメにも度肝を抜く趣向が凝らされている。そのガラクタの城には、驚くべきことにはニワトリの脚に似た４本の足が生えていて、“動く”というよりもがらがら、ぎしぎしと地響きを立てながら“歩く”のである。方々に口を開けた煙突から絶えず煙を噴出しながら、まるであえぐように野を越え丘を越えて歩いていく姿は、異様だがどこかユーモラスでもある。

この城の主のハウル（声：木村拓哉）はハンサムで凄腕の魔術使い。だが、なぜか屈折していて肝心のときに全力を出し切れず無為に日々を送っている。そんなハウルと町で出会ったのが帽子屋の目立たない娘ソフィー（声：倍賞千恵子）。はからずも二人で夢のような空中散歩をして以来、ハウルに心を奪われるが、荒地の魔女（声：三輪明宏）の嫉妬を買い、18歳から一気に90歳の老婆に姿を変えられてしまう。老婆ソフィーと美青年ハウルは寄り添って魔法の城で暮らすことになるのだが…。

ファンタジーとはいえ、二人を取り巻く世界は平和とは程遠い。すさまじい戦争や殺りくが続き、善人や弱者が苦しみ、悪意が忍び寄り、強い者や奢る者もやがて力を失ってゆく。9.11以降の“ブッシュ的世界秩序”への怒りや危機感を反映しているのか。まるでニキの前衛芸術のように。

こうした無力感の中で、ひとりしゃっきりと頼もしいのは“18歳で90歳”のソフィーだ。初めは鏡に映る自らの姿を見て落ち込むが、弱虫の恋人や闘いの犠牲者たちを見るうちに奮い立つ。何とか戦争を止めてと国王に訴えようと、目のくらみそうに高い王宮の階段を一段一段尺取虫のようにがむしゃらに上っていく。同じ階段をもう一人、欲望の固まりのような魔女が這い登る醜悪な姿と対照的だ。世界が末期的症状を見せ始めた今、宮崎監督が初めて希望をいつもの少女ヒロインに代わっておばあさんヒロインに託したことは意味深い。ますます複雑化した宮崎作品だが、ソフィーの存在は動く城とともに群を抜いて強烈である。

©2004 ニ馬力・「ハウルの動く城」製作委員会

シネマ女性学

日本映画（119 分）／宮崎駿監督

●

『　ハウルの動く城　』

全国東宝洋画系ロードショー公開中